
Flower Cake

ぱぺっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Flower Cake

【NZコード】

N9530Z

【作者名】

ぱぺっち

【あらすじ】

灰色の浪人生活を送る宮前照太は叔父のケーキショップでバイトをしている。そんな彼の前に現れたのは、二軒先のフラワー・ショップの長男で三つ上の幼なじみ、片桐まどか。今日もまどかはケーキを買いにやってくるのだが、久しぶりに顔を合わせた幼なじみに対して照太は素直になれなくて……ほのぼのラブストーリーです。

第一話 花屋の前にケーキ屋の僕

「……ありがとう」「やれこおした」

照太の言葉はそつけない。

それなのに、田の前に立つ彼は去りつとしない。

日射しはまぶしいのに凍えるような冬の日の午後、照太は叔父の経営するケーキショップ『あい』のレジに立っていた。寒い外とは裏腹に小さな店内は暖かく、バター や甘いクリームをしてほんの少しば二ラの芳しい香りに満ち、まるでこの中だけ先に春が訪れたようである。

素朴だがどこか可愛らしいケーキたちが陳列するガラスのショーケースをはさみ、照太はスラリと背の高い青年・まどかと向かい合っていた。まどかは一軒隣のフラワーショップ『Ciel』の長男で、照太にとつていわゆる『じ近所さん』である。

「忙しくないんですね？」

「んー、まだ地元に戻ってきたばかりだしね。少しゆっくつしようと思つて」

「じゃあ荷ほどきとかで忙しいんじゃないですか？」

照太のセリフはまるで早く帰れ、といわんばかりである。

それはこの十日間ほぼ毎日通つてくる常連客に対して、ましてや幼なじみに対する態度ではない……もしにこに彼の叔母がいあわせたら、きっとものすごく怒つただろう。

幼なじみ、ね……ホント小ちいじんしか仲良くなかったけど。

照太は田の前に立つ、柔軟で整った顔をフワリとほほほせた男をにらみつけた。こんな風に微笑まれ、親しげに話しかけてきたのは何年ぶりだろうか。

小学校以来じゃん……なんだよ今さら。

小さい頃はよく遊んでもらつた。

おやつも一緒に食べたし、宿題も教えてもらつた。本当の兄弟のようだった。

……でもそれは、照太が中学校にあがるまでのこと。

新しい制服に身を包んだ照太を前に、まどかはまゆをひそめて言ったのだ。

『なんだ、もうただの可愛い弟じゃなくなっちゃつたね』

その言葉に、どれだけ照太がショックを受けたことか。

それ以来、二人は別々の生活を送り始めた。まどかは同級生となるみ、彼女を作り、そして都内の某有名大学へと進学してこの地を去つた。そして照太も照太なりに、まどかのいない生活に次第に慣れていったのだ。

だから今こうして向けられた微笑も親しげな口調も、かつて失つたものだ……それが何年も経つて突然再び与えられ、照太には素直に受け入れる準備ができてない。だからつい冷たい態度、そつけない口調になつてしまつ。

今さらそんな態度……迷惑だ。

まどかはシンプルなクリーム色のロート姿で、カフュオレ色のやわらかそうな髪を肩の上でふんわりと揺らしている。昔から変わらない人目を引く華やかさが、なぜか照太を落ち着かなくさせる。

それにしても毎日ケーキ買って食べて、よく太らないな……こんなに甘党だったっけこの人？

そんな風に照太が考へていると、まどかは「あ、そうだ」と思いついたように切り出した。

「なんの花が好き？」

「は？」

「おいしいケーキのお礼」

照太は困惑したように眉をひそめた。

「お礼なんていりません、お代金はいただいてますし。そもそもこのケーキは叔父が作ったもので、俺にお礼を言われても困りますから」

「だから気を使わなくて済むように、うちの花をフレゼントするよ。なんの花が好き？」

照太は一瞬、季節外れのヒマワリとか言つて彼を困らせてやりたい衝動に駆られた。しかしそんな意地悪するより彼には早くお引き取り願いたかった。だつてもうお会計だつて済ませたし、ケーキの箱だつて渡したのだから、これ以上長居されても……困る。

そう、困るんだよ……なに話したらいいか分かんないし。

だからつい、言ってしまったのだ。

「……だいたい花なんでもらつても、水やりとかメンテナンス」

口にしてから、照太はさすがにこれは失礼だつたかも、と顔をあげると……なぜかうれしそうに身を乗り出したまどかと田代が合つた。

「つまり、手間のかかる鉢植えより切り花の方がいいんだね」

「ちが、そういう意味じゃなくつて……切り花だって毎日花瓶の水を取りかえなきゃいけないじゃん」

照太は叔母の行動を思い出して顔をしかめた。生花の好きな叔母は時々まどかの店で切り花を買ってきては居間に飾つているが、毎朝かかさず花瓶の水を取りかえている。

「そつか、じゃあ鉢植えで世話が簡単なのがいいね」

「いや、そうじゃなくつて……だから……やつば、もうここです」

はああ、と照太はため息をついた……『この人に何言つても無駄だ』と眉をひそめる。

「忙しくないんですね」

三度目となる問いかけに、まどかはふと首をかしげた。

「君はどうなの?」

「……俺は忙しいです。このあと予備校行かなくちゃならないし。叔母が買い物から帰つてきたら出かける仕度しなきや……」

「何時まで?」

「え?」

「「」の店番」

「あ、ええと……四時までだから、あと十五分くらい……」

「やつ」

すると、まどかは拍子抜けするほどあつせつと店を出でこつた。

なんだつたんだ、一体……。

でも彼が戻つてくるまで長くはからなかつた。

少し息を切らしたまどかが再び店の扉をぐぐつたときは、照太がちゅうど店番をあがれうとエプロンを外しかけたところだつた。

「はい、コレ」

まどかが差し出したのは、鉢植えのサボテンだつた。

「名前は『月世界』……君の部屋の窓際に、「」の子をおいてもらつたくて」

まどかの妙な迫力に押され、照太は思わず鉢植えを受け取つてしまつた。

「で、でも……俺、植物なんて育てたことないし」

「お水はあげなくても大丈夫だよ。たぶん来年の春まではね」

「え、そつなんだ……」

来年の春、か。

その頃には受験勉強も終わつてゐるに違ひない。

きつと鉢植えのひとつやふたつ、水をあげる心の余裕だつて生ま

れるかも……と、つい納得しかけた照太に、まどかはさりげなく言葉を重ねた。

「この子はきっと君を好きになるよ……僕みたいにね」「え？」

「なんでもない。じゃあ、また明日」

今度こそ、まどかは店を出て行つた。

あとに残されたのは、半ばぼうぜんとした照太と、照太の手の中にちんまりと収まっているサボテンの鉢植え……どうする、このサボテン？　どうする、照太！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9530z/>

Flower Cake

2011年12月29日20時53分発行